

# 職人往来

## 市井の伝承者たち

文・写真=吉田敬子

### 第12回 侘びの心の継承

#### 建具職人

高橋孝一さん(高橋建具製作所代表  
新潟県新発田市)



簾戸をつくる上で重要な、すだれ貼りをする高橋さん

「葭障子 細身の風の 来たりけり」  
(草間時彦)

初夏を迎えると、襖や障子を簾戸(すだれ)に取り替える。室内はほのかに暗く、簾を透かして見える外の風景と涼やかな風に安らぎを感じる。「季節を迎える、季節を楽しむ。これが、まさに簾戸の醍醐味です」と伝統的な簾戸にこだわる建具職人、高橋孝一さんの工場を尋ねた。

新潟県新発田市に高橋建具製作所はある。材木の買い付け、加工、製作、納品まで、すべて新発田の工場で行う。

当社には三つの自慢がある、と高橋さんは言った。ひとつは事務所も同じ敷地内にあるので、細かいデザインなど、すぐ職人に伝えられ、間違いがなく納得のいく建具づくりができる。もうひとつは、新潟県では良質な杉がとれること。三つめは、

すだれ屋さん。「当社の片腕的存在の職人です。簾戸を使うすだれは、萩・葭・ゴギョウ・竹ヒゴ・天津ヨシ・近江ヨシがあり、国産と中頭産を使っていますが、国産の萩・葭は今、危機的状況にある」と言う。生産者の高齢化、作業の重労働、成育する水場の環境汚染、安い外国産が入ってくることなど、たくさんの問題が山積みなのだ。

萩を簾用に出荷する工程は、①育成する②刈り取る③乾燥する④選別する⑤1本1本を穴に通し、焼きなめす⑥最後に束ねて、しばらく寝かせる。何千本という本数には気が遠くなる。

すだれ屋さんも同じだ。東で仕入れたものを1本1本確認し、太さを揃え、茎の柔らかいもの、虫食い・黒く変色したものは使用せず、枯れたものは鮫の皮でみがく、という徹底ぶりだ。「この手間と地道な作業の積み重ねからできたものの良さが、

後世に残せなくなる。真剣に考え、行動しなければいけない」と高橋さんは呼びかけている。

高橋さんのこだわりは、いつ頃はじまったのか。

新潟県新発田市は、かつて10万石の城下町だった。城下町独特の狭く曲がりくねった道を歩くと、旧家の庭に面した座敷には簾戸がはまっている。「昔から簾戸といえば萩で、すっきりしていて気持ちのいい建具です。建具は、生活といっしょに動いている感じがいいです」。

そんな環境の中で育った高橋さんは、子供の頃、よく行く銭湯で、大工の棟梁と知り合い、棟梁からいろいろな作り方を教えてもらったそうだ。話が聞きたくて棟梁を待ち伏せし、銭湯に来る時間に合わせて入り、話を聞いていたという。

「弟子の頃から簾戸が好きでした。簾戸は、木枠に簾をいれただけの単純な作りで、決まった型はなく、シ



材木の買い付け 新潟県産の杉丸太を見ているときが一番ワクワクするという。



削り 万能機を使って直角を出し、厚さをそろえる。



削り 万能機を使って直角を出し、厚さをそろえる。



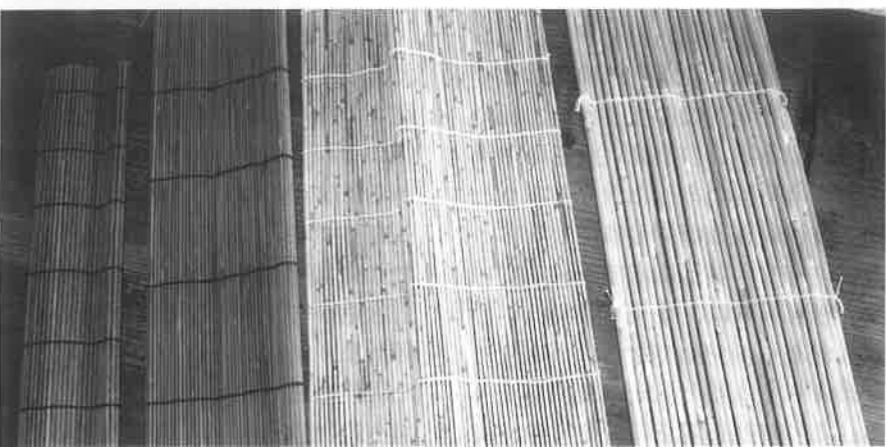
墨つけ 毛引きという先のとがったもので印をつける。



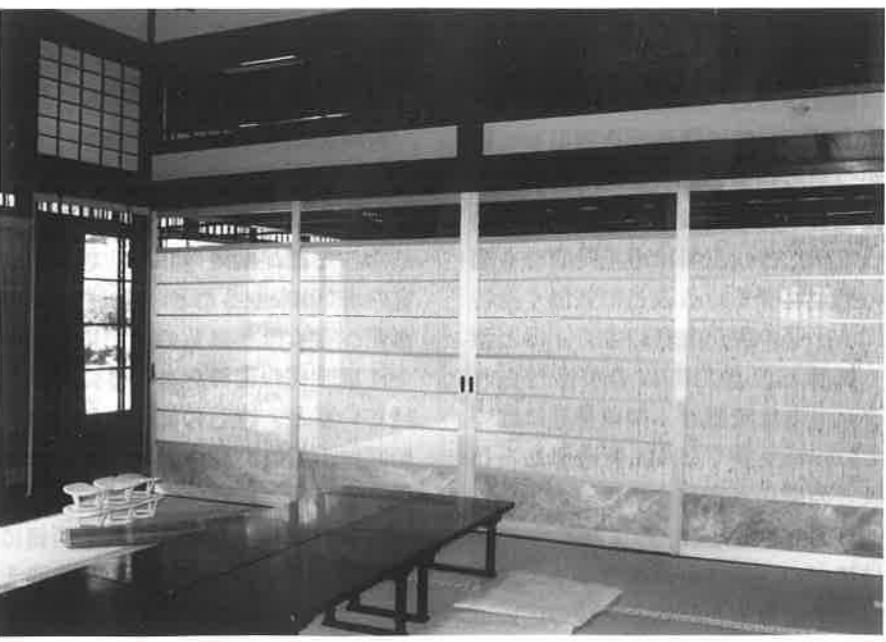
組み立て それぞれの部材を組み立てる。この後、すだれ貼りをする。



建具をつくる道具たち



すだれの種類(左から萩、焼きヒゴ、天津ヒゴ、近江ヒゴ)



簾戸に替えた室内